

## 貨幣學說の辨證論的考察(一)

岩 井 茂

は し が ち

從來貨幣學說の發展に筆を染めた學者はその數、決して少しとしない。併し乍らその多くは各貨幣論家の所説を年代的に羅列したものに過ぎなかつた。そしてよく貨幣觀の主流に掉してその時代々々又は學派々々の特徴を畫き出し得たものはさして多くはない。ワアゲマンは、此の多からざる著者の中の一人であると思ふ。その著一般貨幣論第一冊、貨幣價值と本位との理論の最初五十頁程に畫き出された處は、從來の貨幣學說の單なる年代的記述とはその選を異にし、その中には或時代或學說の精神的類型を探り求めんとする文明的考究態度が多分に含まれてゐる。而してその研究の跡は吾人が取つて以て參考に資すべき多くのものを呈示してゐる様に思はれる故に余は之を左に紹介したいと思ふ。併しワアゲマンの所説の忠實なる再現ではなしに餘程自由な態度で筆をすゝめ、又材料の取捨配列などにも可成の氣儘をした。併し要は原著者が云はんとする處を大過なく傳へるに在るから、微力乍ら此の方面に主力を注いだ。

(1) Ernst Wagemann: Allgemeine Geldlehre. 1. Bd. Theorie des Geldwesens und der Währung. 1923. Berlin.

## 一 總 說

先づワアデマンに従へば根本的貨幣觀は凡そ三つに分れる、一は象徴主義、二は金屬主義、三は名目主義である。第一は貨幣と貴金屬とを同一視し、以て貴金屬をば一般的價值象徴とか價值記號と考へ、又此の意味に於いて富の全體と考へるものである。そして此の考は主としてマアカンテイリストに依つて主張されたものである。第二の金屬主義は、第一の象徴主義を指定「Hese」とすれば、その反指定「Antithese」をなすものであつて、之は貨幣と貴金屬とを同一視するが、併し此の貨幣も貴金屬も共に最早一般的價值象徴ではなくして商品であると考へるものである。此は古典派經濟學者やマルクス主義者のとる貨幣觀であり、之に多少の修正を施せば又、歴史學派や壘太利學派の貨幣觀ともなるものである。第三の名目主義は前二者の綜合「Synthese」たるものであつて、之は貴金屬をば商品と見るが併し、貨幣は價值記號であると考へるものを指す。而して此の所説は最近二十年そこゝの内に起つたものなのである。

如斯根本的貨幣觀を三分してその各々に夫々の特徴を認めても、それは絶對的のものではなく、従つて相當に制限を加へなければ充分に當て欲まらないものである。例へば多くのマアカンテイリストが貨幣の商品である事を明言したり、又金屬主義論者といはれてゐる者が貨幣と商品とは相對立するものであると説いたり、又古典學派や、歴史學派や、壘太利學派の隆盛時にも既に或論者の如きは名目主義的な考を述べたりしてゐる。斯様に實

實際上に於ては勿論例外はあり、制限はあるがとに角、大體の傾向として象徴主義から金屬主義へ、これから更に名目主義へと進んで行つて發展の經路は之を看誤つてはならないのである。

以下その各々に就いて詳述しやう。

## 二 象徴主義

### 一 マアカンテイリズムと象徴主義

象徴主義的貨幣觀はマアカンテイリストの抱いてゐた貨幣觀であるといふことは之を前に説いた。然るに今振りかへつて考へてみるに、經濟學史上マアカンテイリズムとは如何なる主義を指すかといふに、之に統一的、一義的な回答を與へることは困難である。又實際マアカンテイリズムが一個の纏つた學派を構成してゐたともいへない。従つて吾々がマアカンテイリズムの根本思潮といふが如きものを導き出す爲には、當時、實際政策上の意見を發表せる個々の著者の説く處から恐らくは一つの類型を作り出すより外ないであらう。ワアゲマンはマアカンテイリストの種々説いてゐる中から、貨幣に就いては象徴主義を採るのが彼等として本來の面目であると考へてゐるのである。

即ち先づマアカンテイリズム論者は富は金銀より成ると考へてゐたといへる。今其論者のいふ處より二三の例をとつて見れば次の様な意見が見出される。

ホルネツク Hornecks は金と銀とは吾人が最上の血液、又吾等が勢力の最も内部にある精髓であるといひ、ロツク Locke は金と銀とは一國民の動産の内最も堅韌なる又最も重要な部分であるとし、従つて之等金屬を増加することは政治的經濟の最も重要な目的であるといふ。又ジョン・ロー John Law は一國の富と勢力とを構成してゐる商業と人口とは貨幣の量とその流通に俟つこと大であるといふ。かくの如く何れも同工異曲な云ひ現はし方が用ひられてゐるが兎に角マアカンテイリズムの理論は、その本來の思想からいつて、貴金屬即富と解してゐたといふことができやう。そしてマアカンテイリストは貨幣はこの富を代表してゐるものであるといふ見解を持してゐたものであるといふことが許されるれば、彼等はこの貨幣と之に依つてその價値が代表されてゐる處の商品や現實の財産とは對立の關係に立つものとしなければならぬ筈である。此の考はマアカンテイリストの所説を追及すればかうなるといふのであつて、誰れもがかくいひ現はしたといふのではない。否更に多くのマアカンテイリスト達は貴金屬(彼等にとつては此の貴金屬は即ち貨幣である)が商品であることを主張して居つた。即ちポウダン Bohm は貨幣が他の經濟財同様價値の減少するものであることを述べ、又ペーデー Peadar は貨幣の價値を穀物の價値同様その生産費で計算しやうとした。之等は貨幣と商品とを同一視する根本思想から出て來る議論に外ならないのであつて、斯く考へるのは金屬主義的な考へ方でこそあれ、マアカンテイリズム本來の觀方ではない。マアカンテイリズムの根本精神に適つた觀方といふのは取りも直さず貨幣を價値象徴と見ることである。そして此の觀方は又多くのマアカンテイリストの許容してゐる處である。然るに何故此の本來の觀方から離れて、金屬主義

的な、貨幣即富(商品)といふ考に到達したか、之が問題である。併しこのことは後に説くこととして先づ次に象徴主義本來の議論を述べやう。

## 二 象徴的貨幣論

吾々はマアカンテイリストは貨幣を以て價値象徴であると考へ、商品や富の代表者であるとし、かつ此の意味に於いて富の總計であると考へて居つたのだと信ずる。然るに若しさうでなかつたならば、吾々はマアカンテイリズムの根本主張たる貴金屬調達政策を理解することは到底できないのである。即ち彼等は直接には金銀をなるべく多く國內に吸収し、又間接には貿易差額を出来るだけ順調にして之が支拂として受取る金銀の量を多大ならしめんとし、金銀の量がいやが上にも増加せん事を希求したのであるが、斯くの如きとは彼等が象徴的貨幣觀を有してゐたといふことを前提しないでは到底正當に理解し得るものではない。若し反對に彼等が貴金屬即貨幣と考へないで之を一個の商品なりと考へたとすれば、貨幣欲といふものも、他の具體的な財に對する欲望と同様なものになつて、終ひに或限界點に到達しなければならぬ筈である。然るに彼等にはかゝる考は毛頭ない。そして飽くことなく貨幣(貴金屬)を欲求したのである。これ即ち彼等が貴金屬を以つて商品と考へず貨幣、別言すれば價値の代表者と考へてゐたからである。

更にもう一つマアカンテイリズムの思想的根柢に象徴的貨幣觀が存してゐた一證左がある。それは彼等が説く

一種の貨幣數量説である。ダブアンツァティ Davanzati は、地上にありとあらゆる事物は現存の金、銀、銅と丁度相匹敵するといふことに何人もが異存はないといひ、又ロツクは此の思想をば、一方の皿にはあらゆる財を、他方の皿にはあらゆる貨幣をのせた天秤の例を以つて明かにしてゐる。斯くの如く一方に財を他方に貨幣を置く方程式は、貨幣を以て價值象徴と考へることに依つて初めて立てられるものであつて、貨幣即價值物と考へては決して得られる筈のものではない。又かゝる方程式は貨幣を指圖と考へるからこそ得られるのであつて、商品と考へたならば到底得られないのである。

かく觀じ來れば、マアカンテイリズムの貨幣觀を以て象徴主義であるとなす所以が理解されるであらう。然るにシュモラア Schmolter がマアカンテイリズムの最高潮に達せるものとなしてゐるジエムス・ステュアート James Steuart は、貨幣の象徴的性質を強調してゐるが、併し一方に於いて貨幣と商品たる金銀とを區別してゐるから、此の最後の偉大なるマアカンテイリストは又同時に名目主義の第一先驅者といふことができる。

### 三 富としての貨幣

上述の如くマアカンテイリズム本來の主張からいへば、貨幣は價值象徴であるべき筈であるが、併しこの貨幣も亦他の凡べての象徴が擔つてゐる處の象徴の物質化 Materialisierung des Symbols といふ運命に陥つたのである。即ちこれは或ものゝ象徴が、誤つてそれが象徴してゐる處の本體そのものと考へらるゝに至ることを意味すので

ある。一般に記號と本體、假象と實在、概念と事實とが混淆されるのは吾々の心理的な一種の衝動であるが、斯くの如き現象は人間個人に就いていへばその幼時に、又時代に就いていへば文化の低い時に普ねく起るものである。歐州の文化史に於いても化體説 Transsubstantiation (聖晚餐の際に用ふる葡萄酒と麵麴は僧侶が之を祝するときは基督の血と身體とに成るといふ説)、哲學上の概念實在論、國家と王冠の保持者とを同一視する思想 (朕は國家なり) などとして現はれてゐる。マアカンテイリストの貨幣觀も之と同様の心理學的根據に依つて象徴をば之が代表する本體そのものだと考ふるに至り、貨幣即富と思ひ込むに至つた。一部に於いては斯くの如き象徴の物質化が行はれたといへ、純粹形式に於いては貨幣の象徴的性質は尙良く殘存して居つたのである。

### 三 金屬主義

茲に云ふ金屬主義の意味は、かのクナップがいみじくも彼の名目主義に對立する貨幣觀に對して名付けた處とは稍その趣を異にする。クナップにあつては國家を考慮に入れない貨幣觀が金屬主義的貨幣觀であつた。(Vgl. Knapp: Staatliche Theorie des Geldes, 3. Aufl. 1921. S. 3. 宮田喜代藏譯貨幣國定學說、著書序文三頁参照) 然るにワアゲマンが金屬主義といふのは、一つには貨幣機能がその貨幣の素材價值に直接基因してゐるとの故を以つて貨幣と金屬とを同一視するもの、二つには貨幣と金屬とは商品たるの性質に於いて相同じと解し、よつて此の兩者を同一視するところの貨幣論を指す。ワアゲマンは此の意味の金屬主義的貨幣觀が先きの象徴主義的貨幣觀

に亞いで起り來つた所以を次の如くに説き、續いて論を進めてゐる。

## 一 金屬主義の成立

歐洲の歴史に於いて佛蘭西革命の時代に君主政體が中世紀の神祕的な後光を失ひ、そして君主が平民に成り下つた様に、貨幣も亦單なる商品になり下つてしまつた。即ち君主の概念と貨幣の概念とは均しくその象徴的な性質を剝ぎとられてしまつたのである。古き君主思想が象徴の物質化（朕は國家なり）に陥つてしまつた様に、象徴的貨幣理論も亦貨幣を以て商品と考へる物質化の思想に墮してしまつたのである。今此の間の關係を詳論することはできないが、只政治的個人主義と自由主義とから生じた自由貿易論が、アダム・スミスにあつて新たな貨幣論となり、全然新規の根本的貨幣觀となつた事を明かにするを以て満足したい。

## 二 アダム・スミスの説く商品としての貨幣

アダム・スミスは經濟學史上、マアカンテイリズムに對して對立的な立場にあるものであり、又貨幣觀に於いてもその本來の主張は、貨幣も金屬も共に商品であるといふ金屬主義的な立場にあるべきである。併し彼は未だ全く象徴主義的な貨幣觀を蟬脱しきつてはゐなかつた。

例へば國富論第二篇第二章に次の様な字句が見出される。「社會の全體の所得はこの貨幣を媒介として分配されるものであつて、（この貨幣は結局は此の所得の一部分なのであるが）この貨幣とこの貨幣を媒介として流通され



る財とは峻別しなければならぬのである。「社會の所得は財より成り、此の財の流通を援ける車輪たる貨幣よりなるものではない」。又「若或人が自分の恩給を貨幣で支拂はれないで、一ギニーの手形で支拂はれたとするもその人の収入はその紙片より成立つてゐるのではなく、その紙片に代へて得られる處のものより成るのである。一ギニーの金貨は附近の一切の商人に宛てた一定量の生活必需品や便益品に對する手形と見ることが出来る。之が支拂を受けたる人の収入はその金貨より成るのではなく、その金貨に代へて得られるもの、即ちそれと交換して得られるものより成るのである。若しこの金貨と交換して何物も行られないならば、それは破産者に宛てた手形同様、最も無益な紙片以上の價値を有さない。」

斯くの如き字句より察すればアダム・スミスは指圖證説を採り、象徴主義を奉じてゐた様にも思はれるが、併し彼の思想を論理的に追及して考察すれば反對の金曆主義的傾向が明らかに現はれて来る。

元來アダム・スミスの貨幣論は彼がマアカンテイリズムに對してなしたすべての論證と密接な關係を持つてゐる。否むしる彼がマアカンテイリズムの貿易政策や、又その根底に横はつてゐる處の「貿易差額を順調にすることが大切である」といふ思想に對する論難にその端を發してゐる。

アダム・スミスは、「貴金屬以外の自然的財貨を保持し、増加するよりも、貴金屬を保持し、増加することの方が遙かに支配力が大である」といふ假設を「詭辨的」であると見た。そして亞米利加が金銀を發掘すれば、それだけ金銀の道具ができるわけであるから、その爲歐洲にとつて利益である。併し本位政策としては貴金屬の増加は

不利益である。何故かといへばそれが爲め金銀の價格が低落して、鑄貨として以前程適當なものではなくなるからである。即ち今や買手は同じものを買ふのに以前よりも多くのものを渡さねばならなくなるからである。従つて不必要な金銀を持つてきたり、或は保留して一國の富を増加するのは、恰かも一家庭で不要な食器を保存する爲に上等の卓子を空けて置くのと同様愚昧な事である。」

マダム・スミスは此の思想を徹底して、貨幣は機械や貯藏品と相並んで「社會總資本」の一部であるといつてゐる。従つて彼にとつては貨幣も金屬と同様單に商品である。即ち彼は之に依つて自分の經濟政策的觀念を闡明するのに丁度都合のよい出發點を得たのである。又假令その先驅者ヒュウム・ヒュムに倣つて象徴的貨幣觀を假定してゐたとしても、彼は貨幣量そのものは別に重要なものではなく、又貴金屬調達を能事とする貿易政策は誤つたものである、といふ結論に到達し得たであらう。

之に依つて知らるゝ如く、アダム・スミスは象徴的(マアガンテイリズム的)貨幣觀を全然蟬脱したのではないが併しその根本思想より推して考ふれば、既に此の考からは離れて、貨幣と商品とに共通點を見出し、此の兩者を同一視せんとする金屬主義的貨幣觀を持するものであると考へなければならぬ。

尙アダム・スミスは紙幣のことを論じ、その中重要なものは銀行券であるとして、此の銀行券の國民經濟的價値を高く評價してゐる。曰く、「紙幣を以つて金銀に代へることは高價な流通手形を安價な、より適當なものを以つて置きかへることである。即ち以前に於けるよりも製造費や維持費の少ししかいらぬ新規の車輪を以つて流

通をなさしめることである」と。併しそれにも拘はらず彼は銀行券は只貨幣の代用品たるに止まり、常に之を代へて貨幣が得られるといふ信任により、従つて金銀同様の流通能力を有してゐるといふことによつて受授されるのである、と考へてゐる。アダム・スミスは銀行券を紙幣と名付けたものゝ、之を本來の貨幣とはしない。何故かといへば「國內に於いて容易に流通するすべての紙幣を總括しても之によつて金銀の價值を高くすることを得ない。且つ紙幣は金銀の代用となるが、併し金銀は紙幣なくとも流通する」からである。

ともあれこのアダム・スミスの述べた貨幣論はその後繼者によつて二傾向に發展していつた、一方はリカアドオRicardo シーニョアSenior ジェー・エス・ミルJ. S. Mill マルクスMarxの完成した勞働價值説となり、他方はクニースKneissの基礎付けをなした使用價值説となつた。以下に之を説かう。

### 三 貨幣論上の勞働價值説

リカアドオはアダム・スミスと同様貨幣と貴金屬とを同一視し、兩者共に商品であると考へた。彼はマルサスMalthusに宛てた手紙の中で、貨幣とその他全ての商品とに就いて見るに、その價值決定の問題に關し、又その輸出入を統御する法則に關して、この兩者の間に何等本質的の差異はない、といつてゐる。又原論の中で次の様にいつてゐる——金銀も他の全ての商品と同様、之を生産し、之を市場に持出す爲に要する勞働量に應じてその價值を有する。「金が銀より十五倍高價なりといふは、銀の供給が金の供給より十五倍多いといふのではなくし

て、後者の生産には前者の生産の十五倍だけ多くの労働量を要するが爲である」と。處が彼は別の個處で勞賃や利潤、從つてその生産費が重要なものであることを述べてゐるのである。兎に角リカアドオの貨幣論は論理が一貫してゐない。

リカアドオの後を承け、然かも彼よりも徹底的な考を述べてゐるのはシーニオアである。彼は「貨幣價值三講」及「貨幣獲得費用三講」に於て、貨幣の價值は（その内因ばかりで外因が加はらなければ）、結局はその生産費によつて決定されるものであるといふ意見を述べた。

更にジェ・エス・ミルはその「原論」に於て、貨幣價值が貴金屬の生産費に基くものであることを論結した。併し彼は又かういつてゐる——即ち或人が毎週又は毎年受取るところの磅とか志とかいふかねは本當の所得ではないそれは人々が任意の状態に於いて支拂の用に供することを得るものであり、又各人が欲する商品を一定量だけ獲得するの權能をその人に附與するところの一種の切符であり、指圖證であると。之に依つて見れば彼には尙象徴主義的な考が残つてゐるといはなければならぬのである。

要するに古典學派の金屬主義的理論はまだ未完成のものであつた。そは象徴的貨幣觀を完全に脱却することもせず、又他方に於て貨幣價值は労働に依つて決定されるといふ根本思想を純粹に發展させてもゐない。彼等は労働量とは何を意味するか、又労働とその反對給付との間の區別をもはつきりさせなかつた。處が貨幣論上の労働價值説を初めてはつきりさせたのはカール・マルクスである。

マルクスは資本論に於いて、次の如くいつてゐる——「貨幣が商品であるといふことは、先づその完成した形態から出發して然る後にこれを分析せんとする人にとつてのみ一の發見となるのである。交換行程は、この行程によつて貨幣に轉化せしめられる商品にその價值を與へるものではなく、寧ろそれに特殊の價值形態を與へるものである。これら兩方の事項を混同した結果、金銀の價值は想像的のものであると考へられるやうになつたのである。又或一定の機能を盡す場合に於いては、貨幣はそれ自身の單なる記號（しるし）と取り代へることもできるのであるから、そこで貨幣は單なる記號に過ぎぬといふもう一つの錯語が生じて來た」。

「金はすべての商品と同じく、相對的に他の商品を通じてのみそれ自身の價值の大小をいひ現はし得るに過ぎない。金それ自身の價值は、金の生産に必要な勞働時間に依つて決定せられ、等量の勞働時間が凝結してゐる他のすべての商品の分量に依つていひ現はされる」マルクスは之を詳述して次の如く云つてゐる。即ち「金の第一の機能は、商品界に價值記號の材料を供給すること、換言すればすべての商品の價值を同分母の大いさとして、質的に相等しく量的に相互比較し得べき大いさとして表現することにある。斯くして金は價值の一般的尺度たる機能を盡くすことになる。而してこの機能に依つてのみ、特殊の等價商品たる金は、先づ貨幣となるのである。諸の商品は貨幣によつて相互に比較されるのではない。その反對である。即ち一切の商品は、これを價值として見れば對象化された人間勞働であり、従つてそれ自身で比較のできるものであるからこそ、同一の特殊商品によつてその價值を共通的に秤量することができ、斯くしてこの特殊商品をば共通的の價值尺度たる貨幣に轉化し得

るのである。價値尺度としての貨幣は、商品の内在的價値尺度たる労働時間の必然的な現象形態である」。

處がマルクスは又流通行程に於いて貨幣と金とが分離し得るものであることを看過しなかつた、即ち「貨幣が通用することそれ自體に依つて、鑄貨の現實の内容と名目上の内容とが引き離され、金屬上の存在と機能上の存在とが分離せしめられる、そこでは金屬貨幣の鑄貨機能は、他の材料から成る記號又は象徴を以つても置き代へることができるといふ可能性が潜在的に含まれてゐる。マルクスは之によつて、最輕量目や補助貨幣に關する法規は貨幣の象徴的性質を承認してゐるものではないかといふことを指示してゐるのである。そこで更につゞいて曰く「金屬的貨幣記號の中にはこの純象徴的な性質は尙、或程度まで隠蔽されてゐるが、紙幣に於いては明瞭に現はれて來る」と。かくして彼はアダム・スミスと同様紙幣は金屬貨幣の代用物と考へてゐるのである。曰く「紙幣流通の獨特の法則は、紙幣が金を代表する比率にのみ基因することを得るものである」。(之を單純にいへばかうである。即ち、紙幣の發行は、紙幣に依つて象徴的に代表される金又は銀が、紙幣なき場合、現實に流通すべき量を超えてはならぬといふことである。)(紙幣は金記號であり、貨幣記號である。然らばこの紙幣と商品價値との關係如何といふに、それは要するに、紙幣は象徴的、感性的に一定量の金を代表してゐるが、此の紙幣によつて代表されてゐるその金が又更に商品價値を觀念的にいひ現はしてゐるといふことに外ならぬ。だから一定量の金は、他の凡ゆる商品量と同様に、一定量の價値を體化してゐるものである」。

之を要するにマルクスは、貨幣は金屬(金)であり、而して之は他のすべての商品と同様、之が生産に要した勞

働量によつて、その價值が決定されるとなすものであつて、貨幣本質觀に於いては明かに金屬主義に屬し、貨幣價值に關して勞働價值説を代表するものといふべきである。

#### 四 貨幣論上の使用價值説

古典學派の金屬主義はマルクスの勞働價值説に依つて完成されたといつていゝが、之と双幅をなすものに使用價值説がある。そして之を完成したのはカール・クニースである。

扱て勞働價值説では勞働消費量が價值を決定するといふが、人々は此の假設で満足することができなかつた。そこで一の財を生産するのに一定の犠牲を必要とするのは何故であるかを研究した。此の研究の結果使用價值の概念に到達したのである。

周知の如くアダム・スミスは使用價值と單なる效用とを同じものだと考へてゐた、そして彼は後に發展して來たところの效用の外に稀少性をも含むところの使用價值の概念をば知つてはゐなかつたのである。此の使用價值の概念をその理論の根底に置いたのが即ちクニースである。

彼は古典的經濟學者やマルクスと同様に貨幣と商品とを同視し次の様にいつてゐる。即ち「或る量的に測定し得る諸對象の比量關係を測定し、確立する爲めの測定要具、測定手段として用ひることのできるものは、それ自身にも測定さるべきものを或る特定の分量だけ所有してゐるところの對象でなければならぬといふことは自然法

則的に當然なことである」。長さは長さを以て、平面は平面を以て、重さは重さを以て計ることができる。従つて特定量の經濟的價值を測定することは、それ自ら經濟價值を有し、それ自身經濟財である處の對象によつてのみ可能であることは、明々白々の事である。「その上、貨幣によつて經濟價值が意識され、評價され、測定され得べきものであるといふ意味に於いて、貨幣は只々價值對象であり、固有の經濟價值を有する事物であることがわかる」。併し勿論貨幣個片の重さによつてその價值が測定されるのではなく、「貨幣の價值により、即ち一定の貨幣個片の重さに關連した價值量によつて測定されるのである」。

然らば價值は何處に成立つかといふに、マルクスが考へた様に、人間の勞働が此の價值を創造するといふのは誤りである。「日光や、水や、空氣には勞働が含まれてゐないから、吾々は之をあまり欲求し、使用しないが、又他方に於いて、麵麩や、靴や、本には勞働が含まれてゐるけれども、吾々の使用欲は之で充されるものでないだらう」。勞働が使用價值となる場合に於いてのみ、勞働が價值を創造したといへるのである。かくして貨幣の交換價值も使用價值に基因するのである。商品と貨幣とは双方の使用價值が相應するから交換されるのである。この交換は『共通の使用價值あるもの』に還元して初めて可能なのである。又事實上さうだから、あらゆる種類の財を通じて、使用財としての共通の一の單位が存するのである」。

尤もクニースはこの使用價值の單位に關して詳述してゐない、そはこの使用價值にはカール・マルクスが強調した様な一般妥當的な共同分母がないからである。之を根據として使用價值の概念を貨幣に適用し成功を収める



ことはできない。又之から價格論を打擲てたとしても、到底成功しない。限界效用説は此の概念を明解に分析したが、使用價値の概念は財から貨幣へ無雜作に適用することはできないといふことを發見した。

現今獨乙に於いて、嚴密なる金屬主義、即ち貨幣單位は貴金屬の一定の重量單位であり、又鑄貨個片は一般的交換財たるの作用をなし、その價値は他の財の價値測定に役立つといふ見解を抱く經濟學者はあまりない。現今の獨乙經濟學者中で此の考に最も近いのは、ロツツロフとデイルDehl位のものである。

獨乙では此の思想はあまり優勢でないが佛蘭西では之が指導的地位にある。又英米に於いても之が遵奉者は少からずある。

## 五 修正的金屬主義

精練された金屬主義的貨幣論は元來二つに分れる。一つは貨幣と商品、貨幣と貨幣素材とを峻別するものであり、他は貴金屬の價値と直接の關係を失つてしまつてゐて通用するところの、即ち素材價値なき貨幣のあることを認むるものである。此の理論では貨幣は貴金屬同様商品ではあるが、種類の異つた商品である。

第一の思想はロシアーRoscher、ブルノヒルデブランドBruno Hildebrand、ヘルフェリツヒHeffersichなどの抱つてゐるものであるが、一例としてヘルフェリツヒの説く處を擧げてみれば、彼は、商品はそれ自身の爲に受取られるのであるが、貨幣は更に之を轉讓せんが爲めに受取られるのであると論ずる。従つて一の對象は使用財である

か、又は貨幣であるが、併し同時に兩方を兼ねることはできないのである。併し人々は貨幣と商品とを嚴密に區別しなかつたので、結局何時でも商品に轉化し得る、價値の充分ある金屬貨幣が固有の貨幣であると考へてゐる。

第二の思想は、商品價値にたよらない獨立の貨幣價値を認めるものであつて、之は職能價値の概念となつて現はれてゐる。即ち人々は此の概念の助けを藉りて、全然素材價値を持つてゐないか、又假令之を持つてゐるとしても、その通用額と相應するだけの素材價値を有してゐないで、然かも支拂に用ひられる處の貨幣が存するといふ特殊の現象を理解しやうとした。先づ我々が商品と貨幣とを峻別してみると、すぐそこに商品の價値根據と貨幣の價値根據とが別個のものであるといふことに氣付く。處がそれにも拘はらず、商品と貨幣とが互に交換されるのは如何にして可能であるかといふ疑問に逢着する。然るに交換をなす動機は、經濟主體が交換によつて價値のより大なるものを得やうとする點にあると考へ、又商品を與へて貨幣を受取り、貨幣を與へて商品を受け取ることを交換なりと考ふれば、假令貨幣と商品とでその價値根據は異るとしても、貨幣も商品と同種の價値を持つてゐるものに相違ないといふ考は到底念頭を去らないわけである。

此の一方に於いては商品の價値根據と貨幣の價値根據とに差異があると考へられ、他方に於いては貨幣の價値も商品の價値も同種のものであるといふ矛盾を排除して、統一ある説明をしやうとしたのが職能價値論である。

此の職能價値論はワアグナア Adolph Wagner、メンガア Mengar、レキジス Lexis、フィリツボキツテ Philippovich、ミゼス von Mises 等が主張してゐるのであるが、概して若し經濟學者の賛同を得て居る。此の理論を最も要領よ

く述べてゐるのはメンガーであらう(C. Menger: *Art Geld in Handwörterbuch der Staatswissenschaften* 3. Aufl. Bd. II)。彼によれば、貨幣は商品であるといふ命題は今日と雖も尙或程度迄眞理である。又貨幣の流通價值が生ずる根據はその他の流通財の價值が生ずる根據と何等變らない、即ち金屬貨幣の流通價值はその貨幣素材や刻印の價值から來るものであり、券貨にあつては、それを所持すること、密着不離の關係にある法的請求權の價值からで來るのである。「更に貨幣は他の商品と比べると餘程性質の異つたもの、様に思はれても、之と上述のこととは少しも矛盾しない、それは恰かも道路といふ様なものは他の土地、例へば田、畑、牧場、森林などは明瞭に區別されるものであるが、併し道路も矢張り土地たることに變りはないのと同様である」。更に曰く、「吾々が市場へ持出した財の代りに貨幣を得やうと思ふのは、その貨幣素材の效用が欲しいからではなく、寧ろその貨幣の流通が欲しいからであるといふことは正しい。之等の事柄はすべて貨幣の交換手段としての職能を示してゐるものであつて、貨幣の商品たる性質を指示してゐるものではない」と。かくの如くにしてメンガーは一面貨幣が商品であることを許しつつ、貨幣の價值は必ずしも貨幣素材から生ずるものではないといふことを説いたのである。

かくて職能價值の思想を發展して行けば金屬主義の學説は征服されて終ひに名目主義の領域へ入つて行くのではないかといふ疑問が起るが、併しさういふことは決してない。何となれば名目主義では、商品を受取つて貨幣を渡すことを以て、職能價值論者が考へてゐる様に、互に獨立な二つの價值を交換することであると考へないからである。名目主義にとつては貨幣は飽く迄も價值記號であり、貨幣の價值といふ様なものは、借りもの、價

値、反射價値に過ぎないのである。然るに職能價値論にあつては、貨幣は、分析的方法に依つて明かにさるべき固有の内面的價値を有するものと考へられてゐるからである。

## 六 價値尺度としての貨幣

扱て總括的に純金屬主義の特徴如何といへば、それは貴金屬と貨幣とを同一視し、又貨幣は商品であるとす點にある。然るに商品の價値は何に依つて決定さるゝかに關して二派がある。一は勞働價値説で、商品の價値はその商品を生産するに要した勞働量によると考へるものであり、他は使用價値説で、商品の價値はその商品によつて得られる欲望満足の度合によつてきまると考へるものである。金屬主義論者は上述の如く貨幣と商品とを同一視し、少くともその價値決定には兩者共通の法則が當て筈まると考へるが故に、先きに述べたるが如くに、貨幣價値決定に關しても此の二者が分れたのである。

更に純金屬主義と雖も、素材價値のない交換手段や、支拂手段の存することを決して否まぬ。併し之は本來の貨幣とは考へられないで、高々貨幣代用物と考へられるのである。即ち之等のものはそれ自身充分の價値を持つてゐないが、何等かの形で、例へば經濟者が之を金と代へ得ることが確かであると確信してゐるか、又はその貨幣代用物が金屬を代表してゐると考ふるかによつて、兎に角、素材から誘導された價値をその貨幣代用物が持つてゐると考へるのである。修正的金屬主義では先きの貨幣と貨幣素材とを同一視する考は之を捨てて併し、こ

の場合でも依然貨幣を商品と考へてゐる。即ち此の際貨幣は必ずしも素材價値を有してゐる必要はないが、併しある内面的價値を有してゐて、之が他のすべての經濟財と同一の價値決定の法則に従ふものであると考へる（職能價値論）。

先きに述べた象徴主義が、貨幣といふ象徴を物質化し、即ち貨幣と財産とを混同するの危険を冒したと同じ様に修正的金屬主義も貨幣を以て一定量の貴金屬であると考へ込むに至つた。そして彼等は一方では、貨幣は人々の手から手へ轉輾して行つて、經濟上の交換を媒介するものであると考へ、他方に於いては分量の單位として役立つものであると考へた。例へば鐵道は人間を輸送すると同時に貨物の運搬をもするが、これと同様に貨幣は交換手形であると同時に價値尺度であると考へるのである。併し、金屬主義とても貨幣が物の價値を測定するのは物差で長さを測るのと同じ様な方法ではないといふことは充分承知してゐたであらう、けれども、それでも價格は結局貨幣素材の價値と此の貨幣によつて購入し得る商品の價値との比較によつて決定されるものであると考へてしまつた。そこでデイルは、「生産者は消費者の購買心をそゝり、そのそゝられた購買心がどの程度のものであるかといふことは、生産者が賣出した商品に對して消費者が、一般に愛好されてゐる對象、例へば金をどれ程引渡さうとするかによつて評定することができる」といふ。之に對してはベンディクセンは、ある別莊の買手がその別莊の價値を金塊で考へる様な事はどうしたつてあり得ないとの理由で反對する。

金屬主義の創始者たる、アダム・スミス、リカードオ、マルクス、クニースなどは、上述の如くにして價値は決

定されるものだと考へなかつた。彼等は演繹によつて、事物の背後にある價格を決定する究極の力を知らんとしたのである。併し彼等は貴金屬の價值によつて財の價值を直接に評價し得るものなどとは考へなかつたのである。従つて金屬主義本來の面目は、貨幣は貴金屬であり、又従つて商品であるとなす思想の中にあるのであつて、貨幣は價值の尺度であるとなす思想は此の主義に本來のものではないのである、之恰かも朕は國家なりとなす如き象徴の物質化が象徴主義に本來のものではないのと同様である。(未完)

明治節唱歌歌詞

本校講師 堀澤周安

一、亞細亞の東日出づる處

聖の君の現れまして

古き天地とぎせる霧を

大御光に隈なくはらひ

教あまねく道明らけく

治め給へる御代尊

二、惠の波は八洲に餘り

御稜威の風は海原越えて

神の依させる御業を弘め

民の榮りける御業を弘め

外つ國の史にも著く

留め給へる御名長

三、秋の空すみ菊の香高し

今日のおき日を皆こほきて

定めましける御憲を崇め

諭しましける詔勅を守り

代代木の森の代代永へに

仰ぎ奉らん大帝